## 資料5. 転倒転落のリスク評価　採択文献一覧

| 文献番号 | 執筆者、題名、雑誌・書籍名、出版日 | 研究デザインのレベル | 研究デザイン | 介入の内容 | 対象者 | アウトカムのレベル | アウトカムの指標 | 主な結果 | 活動・対策の短所 | 費用 | その他 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| J006 | 茂木 美香(足利赤十字病院), 石原 裕起/緩和ケア病棟におけるチェックボードを用いた転倒転落防止対策/日本医療マネジメント学会雑誌(1881-2503)18巻3号 Page147-152(2017.12) | 3:対照群のある観察研究 | 前後比較研究 | 転倒転落エックボード(以下、ボード)を作って患者情報を可視化・共有化し、この運用と成績について検討 | 2011年7月～2012年3月(2011年度)に発生した転倒転落事例報告書と看護師、及び、2012年度(2012年4月～2013年3月)の転倒転落発生率、状況、要因を比較し、また開始後の看護師 | 2:代替アウトカム | 倒転落発生率、状況、要因を比較し、また開始後の看護師意識調査 | 転倒転落件数・発生率は、2011年度の22件、7. 5件／千人・日に対して2012年度は13件、2. 7件／千人・日と有意に減少した(p＜0. 01)。排泄行動時の転倒転落は2011年度の14件から2012年度は8件に減少し、発生率は有意に改善した(p〈0. 05)。ボード開始後の意識調査では、毎日の患者状態の変化を確認するようになった、患者の行動パターンを予測して援助や環境整備をするようになった、受け持ち患者以外の患者にも配慮するようになった等の改善を認めた。緩和ケア病棟において転倒転落チェックボードで全患者情報を共有し、毎日の見直しと確認を行った結果、転倒転落の防止に有用であった。 | | | |
| J007 | 納谷 知里(北海道医療大学 看護福祉学部看護学科), 山田 律子/わが国の急性期病院における認知障害高齢者の転倒の実態および転倒予防ケアの現状と課題/北海道医療大学看護福祉学部学会誌(1349-8967)13巻1号 Page27-34(2017.03) | 1A:システマティックレビューまたはメタアナリシス | システマティックレビュー | 転倒転落アセスメントスコアシートの導入等 | 医学中央雑誌Web版の1996年～2016年(20年間)の文献検討により、最終的に18件の文献を抽出した。 | 2:代替アウトカム | 急性期病院の認知障害高齢者の①転倒発生率(時期、時間帯、発生場所、診療科、認知障害の有無)、②リスク要因 | 増田ら(急性期状況にある患者における転倒・転落予防への取り組み、2004)は、アセスメント結果に応じた対応策により15名の転倒を予防できたと報告。一方で、犬飼ら(急性期病院における転倒の発生と予防に影響する要因、2013)は、アセスメントしても転倒を予防できない看護側の要因として、「看護師間の転倒リスク評価の不一致」や「患者の流動的な情報の共有不足」を挙げた。 | | 記載なし | フリーワード検索のみをしている。 |

| 文献番号 | 執筆者、題名、雑誌・書籍名、出版日 | 研究デザインのレベル | 研究デザイン | 介入の内容 | 対象者 | アウトカムのレベル | アウトカムの指標 | 主な結果 | 活動・対策の短所 | 費用 | その他 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| J008 | 光永 知和子(井上眼科病院), 橘 令子, 飯嶋 幸子, 大音 清香, 井上 賢治/改訂版転倒転落リスクアセスメントシートの検証　2年間使用したシートを再評価して/日本視機能看護学会誌(2433-3107)1巻 Page89-93(2016.12) | 3:対照群のある観察研究 | 前後比較研究 | 転倒・転落アセスメント・スコアシート(以下、シート)の 改訂により、改訂前後の転倒を比較した。 | 2013年8月～2015年4月までシートを使用した入院患者3001名中、研究期間中の転倒者11名と無作為に抽出した転倒しなかった患者100名を対象とした。 | 2:代替アウトカム | ①シート改訂前後の転倒比較、②転倒した患者の平均年齢、③非遮蔽眼のlogMAR、④シート評価項目の選択、⑤視力障害・機能障害・活動領域・認知力、⑥転倒スコア、⑦看護師17名のアンケート | 改訂前は入院患者数8426名中転倒者13名、改訂後では入院患者数8816名で転倒者11名、χ二乗検定において両群に有意差はなかった。 | χ2検定による比較だが、改訂前シートがなく客観的評価に乏しい。論文中、転倒転落場所、理由、時間、離床センサーの有無など調査結果が記載されていない。 | 記載なし | |
| J010 | 堀口 幸二(長浜赤十字病院 リハビリテーション科), 赤井 信太郎, 山村 温子, 網谷 靖代, 葛谷 みどり, 中村 英樹, 星 参, 呉竹 礼子/多職種で行なう転倒転落防止対策フローチャートの活用/日赤医学(0387-1215)66巻2号 Page428-431(2015.09) | 3:対照群のある観察研究 | 前後比較研究 | 4年間の事故事例分析から転倒・転落ラウンド報告書作成、振り返り活動・分析結果から転倒・転落防止対策フローチャートを作成・導入し、転倒・転落件数を比較した。 | 転倒・転落ラウンド報告書作成前3年間と作成後3年間の転倒・転落事例、転倒・転落防止対策フローチャート導入前4年間と導入後2年間の転倒・転落事例。 | 2:代替アウトカム | 転倒・転落ラウンド報告書作成・活用および転倒・転落防止対策フローチャート導入が多職種で実施する転倒・転落防止対策に有効活用され、件数が減少したか。 | 患者のADL評価と対策を一つにしたフローチャートの導入により、転倒が月5件から月2件に減った。(検定なし) | 人の持つ本来の認知機能・身体面を活かしたフローチャートが効果的と分析しているが、具体的でなく不明である。 | 記載なし | 検定なし |
| J016 | 石田 健司(高知大学医学部附属病院 リハビリテーション部), 永野 靖典, 谷 俊一/転倒転落予防実践プログラム 院内の転倒・骨折に対する転倒/転落防止対策チームの取り組み報告　転倒・転落の予防のための7つの視点を中心に/The Japanese Journal of Rehabilitation Medicine(1881-3526)51巻4-5号 Page258-261(2014.04) | 3:対照群のある観察研究 | 前後比較研究 | 調査結果により検出され7項目の周知徹底、転倒/転落予防啓発ポスターの貼付、患者・家族・職員用の転倒転落防止ビデオの放映配信、キャンペーン用のポスター作製。転落防止のための手順の整備 | 入院患者を対象に、本格介入前の652名と本格介入後の1956名の転倒転落時の骨折発生数と転倒転落報告件数 | 1:臨床アウトカム | 従来のアセスメントシート64項目から 22項目更に7項目に減らした転倒有無の比較、転倒・転落報告件数、骨折発生数 | 骨折件数は、2006,2007,2008年度は、7,7,6件。2009年度には、2件減少していた。しかし、転倒/転落報告件数は、大きくは減少していなかった。統計分析では、骨折発生件数は、有意(p=0.01)に減少していたが、転倒/転落報告件数には、有意差は認められなかった。2012年度に、転倒/転落報告件数は、有意に減少していた.しかし、骨折発生の減少には寄与していなかった。 | 転倒/転落アセスメントシートの項目数を大きく減らした効果に代わり骨折抑制に対する対策が加わり看護業務の省力化が図られるかが課題であると思われる。 | | |

| 文献番号 | 執筆者、題名、雑誌・書籍名、出版日 | 研究デザインのレベル | 研究デザイン | 介入の内容 | 対象者 | アウトカムのレベル | アウトカムの指標 | 主な結果 | 活動・対策の短所 | 費用 | その他 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| J018 | 大木 裕子, 飯島 佐知子/患者の転倒リスクと予防対策の組み合わせ方とその効果に関する文献検討/日本看護管理学会誌(1347-0140)17巻2号 Page116-125(2013.12) | 1A:システマティックレビューまたはメタアナリシス | システマティックレビュー | 文献検討により, 患者の転倒リスクと予防対策の関連, および転倒リスク要因と予防対策の対応を調べ, それらの転倒予防効果を確認すること. | PubMed, CINAHLにより主要なキーワードを“accidental falls”“hospital”“prevention”“clinical trial”として, 2002～2011年の期間について検索を行った. また, ガイドラインおよびシステマティックレビュー, 各論文の文献リストからも関連する論文を検索した. 国内文献は, 医中誌Webにより主要なキーワードを“転倒”“転落”“病院”“予防”“対策”“効果”として, 2002～2011年の期間について原著論文の検索を行った | 2:代替アウトカム | 患者の転倒リスクと予防対策の組み合わせによる転倒予防効果の比較 | A)リスクスコア算出により転倒危険度評価, 危険度別に対策の実施。B)危険度の評価に加え特定のリスク要因に対する対策を実施。C)転倒の原因となるリスク要因を識別するアセスメントによる対策の実施。D)予め特定した転倒リスク要因に対応した対策の実施。の4つの組み合わせがあった。この組み合わせ方の違いによる転倒予防効果に大きな相違はなかった。リスク要因としては、①認知, ②移動, ③①と②の組み合わせ, ④薬剤, ⑤その他の5分類であった。リスク要因に対する予防対策の組み合わせは多様であった. 移動のリスク要因に対する, 運動関連の対策で転倒予防の効果が期待された。その他の効果は決定的でなかった.今後は, 患者の転倒リスクと予防対策を結びつける最善の方法を, コスト面の評価を含めて検討すること, 転倒リスク要因に対する予防対策の効果を明確にしていくことが必要であるとの結論を得た。 | 転倒リスク要因に対する予防対策の効果を明確でない。 | 記載なし | 検索式の明示がないがシソーラスやMeSHを使っているもよう。リスクアセスメントと予防策の組み合わせで4つに分類し、その効果についてもまとめている。 |
| J020 | 佐藤 早百合(いなべ総合病院), 伊藤 恭子, 腰高 秋子, 小林 美和, 佐藤 まゆみ, 浅野 ゆかり, 守山 浩子, 太田 佳奈/転倒・転落予防への取り組み/日本農村医学会雑誌(0468-2513)61巻5号 Page726-731(2013.01) | 3:対照群のある観察研究 | 前後比較研究 | 転倒・転落予防WG(薬剤師1名, 理学 療法士1名, 看護師5名)を立ち上げ次の活動を行った。1.アセスメント・スコアシートの 見直 2.危険度別予防対策の見直し 3.職員への教育研修 4.予防対策が実施されているかを検証する医療安ラウンド | 記載なし | 2:代替アウトカム | インシデント・アクシデント報告件数 , 重 症事例(レベルⅢ)の報告件数、転倒・転落発生率 | インシデント・アクシデント報告件数 :155件→108件<br>重症事例(レベルⅢ);5件→3件<br>発生率:2. 19‰→1. 56‰ | 全体として減少しているが、指標それぞれの何が減少につながったのか不明 | 記載なし | 検定なし |

| 文献番号 | 執筆者、題名、雑誌・書籍名、出版日 | 研究デザインのレベル | 研究デザイン | 介入の内容 | 対象者 | アウトカムのレベル | アウトカムの指標 | 主な結果 | 活動・対策の短所 | 費用 | その他 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| J022 | 尾西 孝一(砂川市立病院), 広田 恵子, 長岡 優子, 森井 泰子, 伊藤 ひろみ/当院における転倒・転落アセスメントスコアシート活用の実態(平成13年から平成15年度の3年間の経過)/砂川市立病院医学雑誌(0289-5102)21巻1号 Page118-120(2004.07) | 3:対照群のある観察研究 | 前後比較研究 | アセスメントスコアシート導入し、過去3年間の実態を調査した | 平成13年度から15年12月までの院内の報告書(インシデント・アクシデント)をもとに転倒・転落に関する報告書を集計した | 2:代替アウトカム | 発生件数、転倒・転落時の行動、アセスメントシートの活用実態、看護計画展開への反映 | アセスメントシート導入後、転倒転落件数は増加した。 | 結果と介入の関係は不明 | 記載なし | 検定なし |
| J024 | 故山 洋子(国立病院機構福山医療センター 医療安全管理室), 水谷 雅巳, 千葉 京子, 松井 ゆかり, 小瀧 民恵, 佐藤 容子, 田本 真理子, 松本 千都世, 田坂 武志, 岩垣 博巳/当医療センターにおける転倒・転落事故の解析/広島医学(0367-5904)65巻9号 Page595-602(2012.09) | 3:対照群のある観察研究 | 前後比較研究 | 統一アセスメントシート導入 | 統一アセスメントシートを導入前(平成17年4月から20年5月・3年5か月)と導入後(20年6月から24年1月・3年8か月)間に報告された転倒・転落事例について | 2:代替アウトカム | 発生実数、発生率。レベル3b以上の事例の発生率を年度別に比較した。導入後に発生した3b以上の事例について、年齢, 性別, アセスメント項目, 骨折件数等を示した。導入前の骨折件数は提示なし。 | 転倒・転落事例実数は、平成20年 6月～平成24年1月までは横ばい。発生率の経年的推移は実数と同様。 統一アセスメントスコアシート導入前後の平均発生率は著変はないが微増。レベル3b 以上の発生率は, 経年的には著変がない。統一アセスメントスコアシート導入後、やや減少傾向。 | | | 検定なし |
| J026 | 藤田 優一(兵庫医療大学 看護学部看護学科), 藤原 千恵子/小児の転倒・転落リスクアセスメントツールの使用状況とその効果/日本看護学会論文集: 小児看護(1347-8222)42号 Page80-83(2012.02) | 3:対照群のある観察研究 | 横断的研究 | 質問紙調査 | 独立行政法人福祉医療機構のデータベースワムネットで検索した全国の小児が入院する病院のある総合病院663施設のうち無作為抽出した603の小児が入院する施設の病棟の看護師長 | 2:代替アウトカム | 小児用アセスメントツールの使用状況の実態及び使用状況と転倒・転落率との関連 | 転倒率(1000人日当りの件数)は、アセスメントツールの有無で有意差なし(0.32件、0.22件、P>0.05)。転落率はアセスメントツールのある病院の方が低かった(0.97、1.49、P<0.05)。転倒・転落率(転倒と転落を合算)は、アセスメントツールのある病院の方が低かった(1.25、1.68、P<0.05)。 | | 記載なし | |
| J027 | 及川 結香(盛岡繁温泉病院), 羽賀 美代子/転倒・転落防止に向けたフローチャート型アセスメントシートの見直し/日本リハビリテーション看護学会学術大会集録23回 Page257-259(2011.10) | 3:対照群のある観察研究 | 前後比較研究 | 従来型の転倒転落アセスメントシートから、フォローチャート型のアセスメントシートへの改訂 | 回復期リハビリテーション病棟の入院患者 | 2:代替アウトカム | 転倒転落件数 | 転倒・転落事故報告、ヒヤリハット報告は平成20年度以前のアセスメントシート使用では44件、平成21年度フローチヤート型アセスメントシート導入後は23件であり、約半数に減少していた。(集計期間とNの表記なし) | | 記述なし | 検定なし |

| 文献番号 | 執筆者、題名、雑誌・書籍名、出版日 | 研究デザインのレベル | 研究デザイン | 介入の内容 | 対象者 | アウトカムのレベル | アウトカムの指標 | 主な結果 | 活動・対策の短所 | 費用 | その他 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| J028 | 梅田 ルミ(東京都保健医療公社豊島病院 看護部), 藤井 由加里, 村山 三枝子, 堤 福子, 藤井 美代子, 伊東 美緒, 高橋 龍太郎/転倒防止を目的とした「リハビリテーション科フローシート」の有効性について/看護管理(0917-1355)21巻11号 Page998-1001(2011.10) | 3:対照群のある観察研究 | 前後比較研究 | リハビリ科フローシートの導入 | (1) 2003 年4 月～ 2009 年3 月までの入院患者のインシデント・アクシデントレポート集計表のうち転倒に関連する情報(2) リハビリ科病棟看護師(看護師長を除く) | 2:代替アウトカム | 転倒件数。予測可能な転倒事故の減少リハビリ科フローシートの転倒予防の有用性 | 2003 年度の転倒件数は、5.01 件から6.48 件と増加したが、2005年度は3.19 件, 2006年度3.57 件と減少、リハビリ科病棟では, 2004 年度は転倒件数が多く, 2007 年度と2008 年度は少ないことが明らになった。リハビリ科フローシート導入前の2003年度の予測可能な転倒事故は98%, 予測不可能な転倒事故は2%であった。導入後2004 年度は予測可能な転倒事故は70%に下がり, 2005 ～ 2008 年度には20 ～ 22%へとさらに低下。看護師へのアンケート調査で回答が得られた16 名のうち, 30－40 歳代(68%)が最も多かった。リハビリ科フローシートは安全策を実施するための情報源として役立っているとした人が94%, 実際に患者の転倒防止に役立っているとした人が94%であった。リハビリ科フローシートを活用することは, 患者のADL が日々変化するリハビリ科病棟では有効である | | | 導入した年は増加したが、その翌年から減少した。 |
| J032 | 小林 綾乃(藤枝市立総合病院), 谷脇 恵利子, 田中 幸, 矢部 ゆみ子/ベッドサイドの環境チェックによる転倒・転落事故の減少/藤枝市立総合病院学術誌(1341-8297)15巻1号 Page18-21(2010.03) | 3:対照群のある観察研究 | 前後比較研究 | 独自に作成した「安全・環境整備チェックリスト」を使用して情報共有し環境整備した | 転倒・転落アセスメントスコアⅡ以上の入院患者43名 | 2:代替アウトカム | ①環境チェック前後の転倒転落件数、②インシデント・アクシデントレポートの危険度分類評価 | ①環境チェックは転倒転落件数が31件から15件へと減少、②危険度分類では、レベル2(19件→8件)、レベル3b(1件→ 0件)と改善した。 | 当初、コーディネータのみであったが、以後は患者と全スタッフの協力により転倒が減少した点は評価できる。1病棟、10ヶ月の研究であり実効性の判断が困難。 | 記載なし | 検定なし |

| 文献番号 | 執筆者、題名、雑誌・書籍名、出版日 | 研究デザインのレベル | 研究デザイン | 介入の内容 | 対象者 | アウトカムのレベル | アウトカムの指標 | 主な結果 | 活動・対策の短所 | 費用 | その他 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| J035 | 西原 慎太郎(松山市民病院), 富田 純右, 浜田 裕子, 平井 覚/病棟環境と転倒の関係について　環境チェックシートを利用して/愛媛県作業療法士会誌(1883-4914)14巻 Page33-35(2010.02) | 3:対照群のある観察研究 | 前後比較研究 | 過去の転倒事例の環境要因から病棟環境チェックシートを作成し、転倒予防対策チーム(リハビリスタッフ、看護師)でチェックを実施。<br>1回目の調査後に、各病棟に調査結果と過去の転倒傾向レポートを通知して2回目調査を実施 | ICUを除く全病棟の同意を得られた患者の病室 | 2:代替アウトカム | 病棟環境の環境チェックシート使用による環境整備効果を判定<br>(1回目、2回目の調査の環境チェックシートの9項目の病棟別不備のパーセンテージを算出、ウイルコクソン順位和検定を用いて比較して効果判定)<br>転倒発生件数も | 環境チェックシートの9項目のうち、ベッド柵の本数、ナースコールの位置、病室内整理整頓の3項目について、環境チェックシート使用による注意喚起と環境整備効果があった。<br>その他の項目は効果がみられず、特に履物の種類に関しては改善がみられず、スリッパ使用率が高かった。<br>調査期間内1ヵ月の転倒発生件数は、全体で23件、病棟環境因子が原因の転倒は5件(21.7%)で過去の転倒発生状況と変化なし。転倒原因は5件中4件に履物が関与していた。 | 患者への病棟環境や履物に対する注意喚起にはつながらなかった。 | 記載なし | 検定なし |
| J036 | 高橋 はるか(星ヶ丘厚生年金病院)/転倒転落評価表を用いた予防対策の効果/社会保険医学雑誌(0911-1158)45巻 Page57-60(2009.12) | 3:対照群のある観察研究 | 前後比較研究 | ①転倒危険因子を分析した<br>②ここから導き出した対策を実施した | ①1年間に転倒した事例42件(29人)<br>②対策前の入院患者延べ8666人、対策後の入院患者延べ9375人 | 2:代替アウトカム | ①抽出された危険因子<br>②転倒評価後の予防策の実施状況 | 対策実施後は転倒リスク表の評価と対策実施は37.9%から、対策実施後は100%となった。<br>有効な予防策は<br>○評価回数を増やす○リスク高い患者には個別プランで対応する○リスク高い患者と家族には転倒予防に関する説明と同意を得る、である | | | 検定なし |
| J040 | 戸川 弓枝(因島総合病院), 角 真由美, 福田 育代, 柏原 文子, 大塚 紀子, 西本 敦子, 岡野 里美/転倒・転落防止に関する24時間継続的な観察を目指してチェックリストの修正/因島総合病院医学雑誌15号 Page31-36(2009.08) | 3:対照群のある観察研究 | 前後比較研究 | 従来の転倒・転落防止に関するチェックリストの修正を行った。5月に修正し、6月から新チェックリストを用いてベッドサイドの環境の調査を実施し、7月と9月に修正を行った。従来のチェックリストは34項目であったが、16項目に削減した。 | 当該病棟看護師と患者 | 2:代替アウトカム | チェックリスト修正前後のヒヤリ・ハット報告書の転倒・転落件数(修正前5か月間と修正後4か月間) | ヒヤリ・ハット報告書の転倒・転落件数が、チェックリスト修正前の5か月間は20件で骨折などの重大事故があったのに対して、修正後の4ヶ月間では7件に減少し、重大事故の報告はなかった。<br>(転倒件数の比較が件数であり、入院患者数を分母とした発生率ではない。期間が5か月間と4か月間と異なっている。骨折の件数不明。) | (転倒件数の比較が件数であり、入院患者数を分母とした発生率ではない。期間が5か月間と4か月間と異なっている。 | 記載無し | 検定なし |

| 文献番号 | 執筆者、題名、雑誌・書籍名、出版日 | 研究デザインのレベル | 研究デザイン | 介入の内容 | 対象者 | アウトカムのレベル | アウトカムの指標 | 主な結果 | 活動・対策の短所 | 費用 | その他 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| J041 | 内田 志保子(三沢市立三沢病院), 甲地 泰子, 馬場 弘子, 古田 由加理/転倒予防対策チームによる取り組みの効果/市立三沢病院医誌(0917-2521)17巻1号 Page17-20(2009.06) | 3:対照群のある観察研究 | 前後比較研究 | 1.転倒予防対策チームを立ち上げ平成18年に5病棟で発生した転倒事象46件のインシデントレポートから発生状況を分析して予防対策を構築・実践する<br>2.転倒要因の分析を基に転倒アセスメントスコアシートと転倒予防フローチャートを作成する<br>3.転倒予防のKYT学習会を実施 | 平成18年に5病棟で発生した転倒事象46件<br>平成19年度に5病棟で発生した転倒事象28件 | 2:代替アウトカム | 介入前後(平成18年度と19年度)の転倒件数比較 | 転倒件数の減少。<br>平成18年度の42件に対して平成19年度は28件と減少した。<br>(転倒件数の比較が件数であり、入院患者数を分母とした発生率ではない) | 転倒件数の比較が件数であり、入院患者数を分母とした発生率ではない | 記載無し | 検定なし |
| J043 | 三原 輝子(秋津鴻池病院), 西 千亜紀/アセスメントシートを活用しての認知症高齢者に対する転倒・転落予防　当院で使用しているアセスメントシートを分析して/日本精神科看護学会誌(0917-4087)51巻3号 Page557-561(2008.12) | 3:対照群のある観察研究 | 前後比較研究 | アセスメントシートの導入 | 7か月間の間に転倒・転落事故を起こして病棟の入院患者 | 2:代替アウトカム | 転倒・転落率、アセスメントシートのチェック項目の変化 | 転倒・転落率:導入前21.3%、導入後23.3%で減少はない。<br>転倒・転落前後のアセスメント項目のチェック項目の変化は68.8%に変化が見られた。 | 汗背う面とシートの転倒・転落の予測可能性を見ているが変化がなく予測には役立っていない | 記載なし | 検定なし |
| J044 | 長内 美奈子(茨城県立医療大学付属病院), 永藤 操, 砂原 みどり, 鈴木 佳奈/改訂版『転倒・転落アセスメントシート』スコア化実施による妥当性の評価/ひろき: 茨城県立医療大学付属病院研究誌(1348-8988)11号 Page5-9(2008.11) | 3:対照群のある観察研究 | 前後比較研究 | 改定版「転倒・転落アセスメントシート」の導入 | 導入前に在インしていた51名の患者と導入後に入院していた患者65名 | 2:代替アウトカム | 転倒・転落発生率 | 導入前転倒・転落率23%、導入後25%で、減少は見られなかった。 | 改定アセスメントシートを用いても転倒・転落を減少に至っていない | 記載なし | 検定なし |
| J046 | 深川 裕香(岡山医療センター), 清水 ちよ, 河内 志津江/転倒・転落に関する看護師の認識調査　対策につながる因子の検討から/中国四国地区国立病院機構・国立療養所看護研究学会誌(1880-6619)3巻 Page192-195(2007.11) | 3:対照群のある観察研究 | 前後比較研究 | 移動能力を評価してベッドサイドに掲示 | 1病棟の入院患者 | 2:代替アウトカム | 転倒転落発生率 | 2007年度の各月の転倒転落発生率は、2006年度より低かった。2007年度の月平均転倒転落件数は1.6件、2006年は3件であった。 | | | 検定なし |

| 文献番号 | 執筆者、題名、雑誌・書籍名、出版日 | 研究デザインのレベル | 研究デザイン | 介入の内容 | 対象者 | アウトカムのレベル | アウトカムの指標 | 主な結果 | 活動・対策の短所 | 費用 | その他 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| J047 | 小川 弘美(国立国際医療センター), 石渡 知子, 木村 麻紀, 荒川 千秋, 川中 淑恵/転倒転落防止対策フローチャートの有用性に関する研究/看護実践の科学(0385-4280)33巻1号 Page74-77(2008.01) | 3:対照群のある観察研究 | 前後比較研究 | 転倒・転落フローチャートの導入 | フローチャート導入前の入院患者42名と導入後入院患者63名 | 2:代替アウトカム | 転倒・転落数 | 転倒・転落数の統計的な有意差無し | 差がなかった理由は不明のまま。 | | |
| J049 | 鍋嶋 薫(やわたメディカルセンター), 吉村 洋子, 藤田 三恵, 中田 恵子, 狭間 登美枝/独自の転倒対策表の妥当性の検証/日本リハビリテーション看護学会学術大会集録19回 Page175-177(2007.11) | 3:対照群のある観察研究 | 前後比較研究 | 従来の転倒転落アセスメントシートから、ADLの評価に合わせて対策まで示した対策表に改訂 | 改訂前の平成18年3月～4月の入院患者107名と、改定後の平成19年3月～4月の入院患者102名 | 2:代替アウトカム | 転倒リスクが高いと判定された患者の中での転倒転落率 | 18年度の入院患者で転倒リスクが高く転倒対策が必要な患者:16名(14．9%)。そのうち転倒患者8名(50%)平成19年度の入院患者で転倒対策が必要な患者15名(14．7%)、そのうち転倒者数5名(33．3%)であった。P<0.05 | | | |
| J050 | 佐竹 夏希(近畿大学医学部附属堺病院), 塚田 清加, 安井 香織, 阪本 光, 中村 雄作/神経内科病棟における転倒事故予防の取り組み/Osteoporosis Japan(0919-6307)15巻2号 Page305-306(2007.04) | 3:対照群のある観察研究 | 前後比較研究 | 転倒予防を目的にアセスメントシート・チェックリスト・パンフレットを作成して導入。 | 神経内科疾患患者109名(平成16年度:75名、平成17年度:34名) | 2:代替アウトカム | 転倒率 | 平成16年度の転倒率は25.3%(19/75)であった。平成17年度はアセスメントシートを導入し、患者用のパンフレットも作成した。平成17年度の転倒率は29.4%(10/34)であった。パンフレット使用患者22名のうち5名(22.7%)、認知症や視力低下などのためパンフレットを使用できなかった患者12名のうち5名(41.6%)が転倒した。 | | 記載なし | 検定なし |
| J052 | 鵜浦 真澄(龍ヶ崎済生会病院 看護部), 板倉 朋世, 齋藤 幸江/転倒転落防止フローチャートによる転倒予防対策の有効性 リスクレベル分類からの分析/日本看護学会論文集: 看護管理(1347-8184)36号 Page468-470(2006.03) | 3:対照群のある観察研究 | 前後比較研究 | 転倒転落のリスク評価と対応を統合した転倒転落防止フローチャートの導入 | 導入前の平成15年度入院患者54647人と、導入後の16年度入院患者62337人 | 2:代替アウトカム | 転倒転落報告に占めるアクシデントの割合 | 導入前は63件の報告があり、内13件がアクシデント(20.6%)であった。導入後は96件の報告があり、内13件がアクシデント(13.5%)であった。有意差なし(P>0.05)。リスクの高い転倒転落は減らなかった。 | | | |
| J053 | 井内 基子(京都逓信病院 看護部), 堀 真紀子/当院における転倒事故の実際と今後の課題/逓信医学(0387-1320)58巻5号 Page337-343(2006.12) | 3:対照群のある観察研究 | 前後比較研究 | ・転倒事例背景の分析 ・アセスメントシートによるリスク分類に応じた転倒防止対策の実施 | 転倒背景分析:患者85件 アセスメントシートの分析:1027件 | 2:代替アウトカム | 転倒事故の発生率 | 平成16年1月～12月の転倒患者:47件(3．8%)<br>平成16年1月～12月転倒患者数:33件(2．7%) | 研究方法の記載がない 有意差が検討されていない | 記載なし | 検定なし |
| J063 | 近藤 かおり(北海道社会保険病院), 後藤 由佳里, 笠井 真由美, 須藤 由紀子, 増川 昭子/転倒・転落防止への取り組み/北海道社会保険病院紀要(1349-6093)4巻 Page12-16(2005.11) | 3:対照群のある観察研究 | 前後比較研究 | 転倒転落アセスメントを患児の親と共に行う | 小児病棟の入院患者 | 2:代替アウトカム | 転倒転落件数 | 親と共にアセスメントする前の6か月間に15件、実施後の6か月間に9件の転倒転落が発生した。 | | | 検定なし |

| 文献番号 | 執筆者、題名、雑誌・書籍名、出版日 | 研究デザインのレベル | 研究デザイン | 介入の内容 | 対象者 | アウトカムのレベル | アウトカムの指標 | 主な結果 | 活動・対策の短所 | 費用 | その他 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| J064 | 須田 喜代美(竹田綜合病院), 塩谷 徳子, 池田 由利子, 高山 俊行, 渡部 小百合, 竹田綜合病院医療安全管理委員会/転倒・転落防止対策におけるアセスメントスコアシート導入効果の検討/竹田綜合病院医学雑誌(1347-0183)31巻 Page10-15(2005.12) | 3:対照群のある観察研究 | 前後比較研究 | 転倒転落アセスメントスコアシートの導入 | 平成15年7月の転倒・転落アセスメントスコアシート導入前後1年間の入院患者 | 2:代替アウトカム | 報告件数に占めるアクシデントの割合 | 導入前1年間のインシデントレポートの報告件数は1067件、アクシデントの割合は2.60%であった。導入後1年間の報告件数は1074件、アクシデントの割合は4.88%であった。アクシデントの割合が増えた(検定なし)。 | 導入後に発生率が高くなっている原因はとくていできない。70歳以上の高齢者の割合が前年度に比較しやや高いことから影響も否定できない。 | | 検定なし |
| J065 | 泉 久美子(黒石市国民健康保険黒石病院 看護部), 村上 和美, 工藤 昭子/3階東病棟における「転倒転落アセスメントスコアシート」の使用状況/黒石病院医誌(1345-7705)11巻1号 Page73-77(2005.10) | 3:対照群のある観察研究 | 前後比較研究 | 転倒転落アセスメントスコアシートの導入 | 病棟の入院患者 | 2:代替アウトカム | 転倒転落発生率 | 導入前の転倒転落発生件数・割合は25件、5.9%であった。導入後は4件、4.1%であった。(Nは不明、検定なし)。 | 高齢者の発生率は各々7.0%,6.9%と差がなかった.3ヶ月間と短期間の検討だった。当科施設の特殊性を考慮したスコアーシートの見直しが必要。 | | 検定なし |
| J066 | 水戸川 亜美(広島市立安佐市民病院), 林 安那, 大橋 美弥子, 沖田 真奈美, 中林 八千代/脊椎疾患患者の転倒転落事故分析　アセスメントシートを活用して/日本看護学会論文集: 看護管理(1347-8184)35号 Page235-237(2005.03) | 3:対照群のある観察研究 | 前後比較研究 | 転倒転落アセスメントシートの改訂 | 入院患者 | 2:代替アウトカム | 転倒転落件数 | 転倒転落発生件数は、導入前7か月が19件、導入後7か月が15件であった。(検定なし) | | | 検定なし |
| J071 | 石井 敦子(三井記念病院), 戸嶋 りつ子, 川井 幸江, 宮下 光令/転倒・転落アセスメントシートの段階的評価　患者参加型の転倒転落防止まで/日本看護学会論文集: 看護管理(1347-8184)33号 Page48-50(2003.03) | 3:対照群のある観察研究 | 前後比較研究 | 転倒転落アセスメントシートの作成と改訂 | 外科病棟の入院患者。シート作成後9か月間(第1期)の患者71人、改定後7か月間(第2期)の患者209人、再改定後7か月間の患者182人。 | 2:代替アウトカム | 転倒転落発生率 | 転倒転落発生率は、シート作成後9か月間(第1期)が19.7%、改定後7か月間(第2期)が2.9%、再改定後7か月間が2.7%であった(P<0.001)。 | | | |

| 文献番号 | 執筆者、題名、雑誌・書籍名、出版日 | 研究デザインのレベル | 研究デザイン | 介入の内容 | 対象者 | アウトカムのレベル | アウトカムの指標 | 主な結果 | 活動・対策の短所 | 費用 | その他 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| J072 | 吉田 玲子(富山県高志リハビリテーション病院), 海木 外希子, 高村 真由美, 下崎 ふみ子/転倒防止への試み　チェックシートを活用して/日本看護学会論文集: 成人看護II(1347-8206)32号 Page124-126(2001.12) | 3:対照群のある観察研究 | 前後比較研究 | 転倒防止チェックシートの導入 | リハビリテーション病院の入院患者。導入月の入院患者は54人。他の期間は不明。 | 2:代替アウトカム | 転倒転落件数 | 導入前7か月間は月平均4.7件の転倒転落が報告された。導入後1か月間は1件、翌月は5件であった。 | | | 検定なし |
| J074 | 佐伯 覚(産業医科大学 リハビリテーション医学講座), 舌間 秀雄, 蜂須賀 研二/当院における転倒・転落予防の取り組み　転倒予防ワーキンググループによる介入の効果/日本職業・災害医学会会誌 (1345-2592)58巻4号 Page184-189(2010.07) | 3:対照群のある観察研究 | 前後比較研究 | WGの起ち上げとアセスメントの導入、教育の実施等の複合的な介入を同時に開始 | 入院患者 | 2:代替アウトカム | 転倒転落発生率、傷害を伴った転倒転落発生率 | 転倒転落の発生率は、介入の前後で大きな変化なし(2‰程度)。骨折などの傷害を伴った転倒転落の発生率は、介入開始前が0.08‰(1.75件/月)、介入開始後が0.03‰(0.5件/月)であり、低下傾向が見られた。 | | | 検定なし |